

道を求めて

求道者

新年にあたり特に歎異抄の第二章を拝読して新らしく聖人にふれ、念仏しつつ本年を迎えたことを感謝し、恵まれた本年が求道の一ヶ年であるようにと念じつつペンをとりました。以下歎異抄第二章について味ってゆきます。

「各々十余ヶ国の境を越えて、身命を顧みずして、尋ねきたらしめたもふ御こころざし、ひとへに往生極楽の道を問いきかんがためなり。」

まず最初に見出さるるこの一節を深く味読して、万感深く胸にわきおこります。

我らはまずそこに老いませる念仏の聖人にあい、道を求めて関東から京都にのぼって来た真剣なる求道者を発見いたします。

憶いを遠く七百年の古にはせる時、日本の有様が描かれる。比叡山は老いたりといえども、天台宗は今なお盛大であった。高野の真言、南都の華嚴、さては禅宗、いわゆる、華、天、密、禅の四大乗は、聖道の旗をおしたてて、少くとも形の上では日本の教界を支配していました。さらに新らしく興隆しかけた浄土門の中にも、色々な派が生れて、信を高調するものがあり、行をいいはるものがある。かくて日本は過渡的な深い／＼疑惑の雲におおわれていました。さらにこの第二章をうかがうについて、忘れることの出来ない背景は関東における信仰界の惑乱であります。

その一つは、親鸞聖人の御長男、慈信房善鸞師の惑乱であり、その二は、法華の行者、日蓮上人の手厳しい折伏であります。

聖人関東に御在任の頃、念仏一つによって救われるとのみ教えを受けた同朋同行たちが、人もあろうに善鸞師によつてとなえられる秘事法門にかき乱されました。御消息集の中に

「慈信坊の下りて『我が聞きたる法文こそまことにてはあれ、日頃の念仏は皆いたづらごととなり』と候えばとて、大部の中太郎の方の人は九十なん人とかや、みな慈信坊の方へとて中太郎入道を棄てたるとかや聞き候。如何なる様にて然様には候ふぞ、詮ずるところ信心の定らざりけると聞き候。如何様なることにて然程に多くの人々のたじろぎ候ふらん、不便のやうと聞きさふらふ。」

とあります。これを拝読しますと関東は随分と動揺して、今までのお念仏を捨てて善鸞師の方に動いていった様子であります。

日蓮上人は自ら法華の行者、上行菩薩と名告り、日本の国の柱なりと叫び、各宗に向つて有名なる四個格言「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊」をふりかざして、折伏の太刀風も物すごく、関東の野に大センセイションを巻き起こしました。

今まで念仏することが助かることだと信じていた人たちが、ただ信じて称えるだけでは助からない、もつと奥深いことがあるのである、「日頃の念仏は皆いたづらごとなり」と聞かされ、さらに、念仏は浄土への正定業でなくて無間地獄への悪業である、との叫びを聞いたのだから、動くのも無理はありません。はたせる哉、一部の人たち

は深い疑いを持つて来ました。今や念仏門は大きな試練の中におかれたのであります。

「疑惑」それは決してそれだけで尊いことではない。しかしながら疑いは尊いものを生み出す母体であります。深い世界にと連れてゆかれる契機であります。いい加減なところで自己を偽っていたものは、こうして荒い風に出くわすと、またたく間に吹き飛ばされてしまいます。彼等は疑った。疑う者は迷う。疑うが故に求める。深刻に迷う苦しさを味わった者にだけ、やがて救われる道が恵まれます。親鸞聖人は関東の御住居を閉じて、その晩年を京都でお暮しになりました。その時のことである。こうした疑いをもって求道者たちが、常陸の国から、下総、武蔵、相模、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、近江等の諸国を経て京都に来しました。

七百年の昔です。「身命をかえりみず」との聖人の仰せは文字通りの事実です。交通機関のない時代に、こうして関東から京都まで歩いて来ることは命がけのやりかたです。生命の道、本質的に生かされる道を求めて、出て行かなければおられない衷心の願い、一度この厳粛な魂の声を聞きはじめると、水火をも厭わず、聞き開き、求めきらないではいられませぬ。

過去の聖者たちが、血みどろになつてお開きになつた道、それがたやすく公開されて、今では誰の手にも受け取られるということは、一方から言えば恵まれたことでもあります。しかし一方から申せば罰あたりでもあります。親鸞聖人のすぐれた、純化しきられた念仏生活を仰ぐのは尊い。しかし何時のほどにか、その至られた美しい果だけがほしいために、あまり骨折らないで、手間をかけないで、結果だけつかもうとする、その功利主義的なるさの前に、命をもって求めなければならぬ生命の道が得られるでありましょうか。ついに如来の大法を伝えるべき説教が、安上りのする興行の姿にまで低下したことは、嘆かわしいことであります。

聖人には決して「末世末代の衆生よ、お前らを楽にさしたいばかりに、俺はこうして聖道の修行をして見せて、易行の他力につかすのだぞ、俺は仏の化身であるぞ。九十年の生涯は衆生可愛さの一念に……」というようなお心持ちは微塵もなかつたのです。そんな山師ではなかつた。ただ偽ることの出来ない心の声のままに、一切を求めて、一切を棄てて、ひたすらに自分一人の救いを求めて行かれたのであります。私どもは、聖人を本願海に浮んだ仏の化現として仰信します。けれども、それは私のあさましさや、だらしない暗の生活をさまして下されこそすれ、いい加減に妥協したり、甘えたりすることを許される何ものをも含んではおらないことを感得いたしません。

私どもは忠実に合掌して師教の前に立たねばなりません。

半偈の偈

釈尊は迦葉尊者に説いて言われる。

「迦葉よ。遠き古、まだこの世に仏の出でまぎぬ頃、私は雪山に住んで菩薩の行を修めていた。地には薬木が一ぱいに生えており、いろいろの鳥はその間に集い、流れは清く、果物は甘く、諸の香の高い花が咲きほこっていた。私はその時、広く大乘の教

えを求めていたが得ることは出来なかった。その時、諸の天人たちが私をあやしんでたがいに語りおうた。

「この者は、欲のさわがしい思いを一切去つた寂かな心を持った離欲の人である。恐らくは来世に帝釈天にでもなろうと思つていたのであろう。」と一人の神は言つた。

「世間には大士というものがある。衆生を恵むために修行はするが、自分の為をはかつては何事もなさぬ人である。かような人は生死の上にもみ過ちを見るので、たとえ地に財貨が満ちていても唾を見ると等しく少しも貪着しない。肉身の妻子や、下僕や、舎宅さえも捨て、また天上の榮華すら望まない。ただ無上正真の道を成し遂げて、一切の衆生を恵もうと望んでおる。彼は蓋し、こういう大士なのではあるまいか。」

すると帝釈天が言つた。

「もしお前の言うようなことなれば、この人はすべての世間の衆生を救いとるはずである。天子よ。世にたのむべき仏の大樹があるならば、能く人天の煩惱の毒蛇を除くであろう。衆生が一の仏樹の木陰によるならば、煩惱の熱毒を離れるはずである。もし彼が後に善逝ほしびとなることがあるならば、我らはみな無量の煩惱をなくするはずである。けれどもかようなことはたやすく信じられない。百千の衆生はみな菩提に心を立てるけれども、極めてわずかな縁にふれてもその志は壊れてしまうではないか。ちようど水に影を宿した月が、さざ波にすら動いているのと同じようである。実のところ私は今日までそうした多くの人たちを見てきたのである。それで私は、今彼のところへ行つて試み、その菩提という重荷に耐え得るかどうかを知りたいと思う。」

かくて帝釈天は直ちに姿を羅刹に変えて雪山へ下り、朗らかな声で

諸行無常（意識）あらゆるものは無常である

是生滅法

このゆえに生じたものは滅するのが法のすがたである。」

と、仏の唱えた偈文半分を誦したのであつた。この半偈を聞いた時の私の心持ちは、全く渴いた人の水を得、囚われた人のにわか赦しを聞いたようなものであつた。喜びに堪えないで、直ちに座を立ち、手で髪をあげながら、四方に向かつて叫んだ。

「今尊い半偈をお説きになつたのはどなたでありますか。どなたなればこそ、かくも尊く解脱の門を開く偈文をお説きになり、諸仏の道を示され、飢えたものに無上の道を味わせ、私の心の暗を啓ひらいて、蓮の次第に開くように、明るうさせて下さいましたか。」と、言うは云つたが、しかし私の眼にはさらに何者も映らなかつた。そこには恐ろしい形をした羅刹がいるだけであつた。私は思うた。

「今、半偈を唱えたのは、この羅刹であろうか。いやそうではあるまい。あの恐ろしい形をした羅刹の口から、尊い諸仏の梵音みえがもれ出るということは、火中に蓮華が生じ、日光から水が湧き出るようなものである。しかし、かの羅刹がもしや古の諸仏にあつて、あの偈文を聞いたかも知れない。」

こう思いかえされたので、まず羅刹に尋ねて見ようと決定した。即ち彼のところへゆき、

「あなたはどこでこの尊い半偈を得られましたか。」と尋ねた。
すると羅刹は、

「いやそのことなれば尋ねてくれるな。実は私はこの数日の間、何も食べていない。あちこちと食物をさがしているがどうしても得られない。そのため心が乱れて、思わず唱えたのがあの半偈である。別に心あつて唱えたわけではない。」と言う。私はさらに迫った。

「そう言わずにどうか教えて頂きたい。私は必ず生涯あなたの弟子になりましょう。あなたの今の偈文はまことに尊いものであるが、言葉も半分、意味も完全していない。財の施はつきることもあるが、法の施にはつきることがないという。どうあつても教えて頂きたい。」

「いや汝は自分のことばかり考えていて、この私のことは少しも念うてくれぬではないか。私は今飢えていて、到底説くことは出来ない。」

「ではあなたの御食物は何でありますか。」

「問う要はあるまい。もし言うたら何人も驚くであろうから。」

「ここには誰もいない。ただ私だけである。何も恐れは致しませぬ。その食物を言つて下さい。」

「それならば言おう。私の食物は人間の温かい肉、私の飲物は人間の熱い血、ただそれだけが私の食物である。」

「それならば、どうぞ、後の半偈を説いて下さい。やがて死ぬるこの肉体である。私には少しの用もありませぬ。死んで虎狼や梟に食べられるよりは、今、大士に供養して、尊いみ法にかえた方がはるかに本望であります。私は今この朽ちはつる肉体を捨てて、永久に変わらぬ堅い法の身を得たいと願うております。」

「いやさようなことを言つても、誰も信ずることは出来ない。」

「それは愚かしい言葉と思います。喩えば瓦や礫を棄てて七宝の器をとるように、この朽ちはつる身を捨てて金剛の身を得ようというのではありませんか。それでもまだ信じられぬと言われるならば、私は諸天、諸菩薩、十方の諸仏たちに誓つてその証を立てて頂きましょう。」

「それほど言うならば、後の半偈を説いてやろう。」

かくて羅刹はようように肯いた。私は衣をぬいで、羅刹のために法座として敷き、「ではどうぞ後の半偈を説いて下さい。」と恭しくひざまずいて言った。

すると羅刹は、

生滅滅已 生滅に囚わるる意を滅すれば

寂滅為樂 そこに寂滅の樂しみがある。

と説きおわり、

「さあ菩薩よ！私はこれで全部の偈文を説いた。汝の願いは満たされたであろう。もし衆生を恵もうというのであれば、私にその体を施してくれ。」と言った。

迦葉よ。私はその時、深くその偈文の義を味い、それからその偈文を石や壁や、あるいは樹や道のところどころに書きつけ、さて再び衣をつけて高い樹に上った。すると樹の神が

「何をするのか。」と私に尋ねた。

「偈文を頂いたお礼に、この身体を献げようとするのである。」

「そのような偈文に、何の徳があるのか。」
「これぞ実に三世の仏たちの正しい道である。」
私はかように答えて、さらに

「どうかすべての強い人達や、また少しの施をして心たかぶる人たちに、今私が半偈のために尊い身をば草を捨てるようになげうつの見せてやりたいものである。」
と言って、言葉がおわると樹から身をおどらせた。しかるに、まだ身が大地に至らぬ前に、かの羅刹は帝釈天の身にかえつて、私の身を中空で受け取り、地上においてくれた。そして諸の天人たちと一緒に我が足もとにひれ伏して讃めたたえた。

「尊い志である。これこそ真の菩薩である。よく量なき多くの衆生をお恵み下された。どうぞ私の罪をお許し下さい。そしてもし無上正真道を成しとげられた暁は、この私をもお救い下さい。」と言って、私の足を礼して去った。

迦葉よ。私はこのように半偈のためにこの身を捨てたが、それから十二劫の後に、弥勒に先だつて道を成就することが出来たのである。迦葉よ。私の量なき功德はこれみな如来の正法を供養してしまつた報いである。汝もまた、今無上正真の道に心を立てた。もう恒河の砂ほどに多い菩薩よりも超えすぐれている……」

諸行無常 いろはにほへどちりぬるを

是生滅法 我がよたれぞ常ならむ

生滅々已 ういのおく山けふこえて

寂滅為樂 あさきゆめ見しゑひもせず

これは有名なる『摩訶般若経』の、いわゆる雪山偈の由来であります。半偈を得るために羅刹に肉体を与えてもみ法の智慧を求め抜かれたその求道心は、「身命をかえりみずしてたづねきたらしめたまふ御こころざし……」と、聖人のおん口よりもれたお言葉の根源ではありますまいか。

求道の態度

『大無量寿経』に曰く

「人、至心に精進して道を求めて止まざることあらば、みな当に尅果すべし。何の願いか得ざらん」と。

また曰く、

「もし聞かば精進して求めよ。よく法を聞いて忘れず、見て敬ひ、得て大に慶ばば、即ち我がよき親友なり。是の故に常に意を発すべし。たとひ世界に満てらん火をも必ず過ぎて要めて法を聞かば、かならず当に仏道を成じ、広く生死の流を濟ふべし。」

親鸞聖人はこの意を受けて

「たとひ大千世界に みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは ながく不退にかなふなり」

と和讃に訓えられました。

蓮如上人曰く

「いたりてかたきは石なり。至りてやはらかなるは水なり。水よく石をうがつ。心源もし徹しなば、菩提の覚道、何事か成ぜざらんといえる古き詞あり。いかに不信なりとも、聴聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候間、信をうべきなり。只仏法は聴聞にきはまることなりと云々ひ」(御一代聞書)

親鸞聖人二十ヶ年の求道を憶う。

生命をつぐ者は、生命を捧げてゆく。

釈尊、大迦葉尊者……と数えて禅門、第二十八世達磨大師、この不朽の聖者は梁の武帝の時、印度から支那にわたつて来た。学問仏教、型の仏教、生命の枯れた閑葛藤にやつれた教界を見てとつた大師は何と考えたのか、趨山の少林寺に入つてしまつた。壁に向かつて坐禅して動かぬこと九年、何のためであるのか。

多くの求道僧がこの山を上つて来る。だが何も語らぬと聞いて失望して帰つたものがこれまでどれだけあつたかわからない。

ある冬の寒い日――若い求道僧が上つてこの寺を訪れた。

「私は慧可と申す者で御座います。ここには達磨大師とて尊い聖者がおられると聞きます。何とぞ御導き下さいますよう、お取りはからいが願いたい。」

「折角だが大師は面壁すでに九年、今日まで一語も発せられませぬ。気毒ながらその儀はかないませぬ。」

彼は考えた。ここに三人のお弟子が御座る。もし導く心がないならば、このお弟子6はおとりならぬはずである。これには何か子細のあることであろう。

「何とぞ、お拝み致すだけでも結構で御座います。お取りはからいを願います。」

「それならば勝手に外から拝みなさい。そこから後にまわつて見られい。」

窓を通して大師の後ろ姿が見える。彼は立つた。無言で立つた。

雪が降る。風は身をきるよう。

一日立つたまま日が暮れる。

達磨大師は知らぬものの如く、彼は何も言わない。

夜が更ける。一晩明ける。

二日目、昼が来る、日が暮れる。

三日目が来た。朝、昼、同じように雪の中で、日が暮れて、夜が更ける。

とうとう四日目の朝が来た。

「おい！ 貴様は何しに来た！」

動いたく、九年ぶりに動いた。大師はついに顔をこちらに向けて来意を問うた。

「私は慧可と申す者で御座います。仏の道を求めてまいりました。何とぞお導きをお願いいたします。」

「なに、仏の道？ 仏道を修めようと思えば生命がけで求めなくてわかるものでないぞ！」

「生命がけならこそ、三日三晩もここに立ち続けましたので御座います……。」

「高慢者めが！ 智慧もなく、徳もない者が、いたずらに憍慢であつて仏道がわかると思うか！」

大師はどなつただけで、またも壁に向いてしまった。

その日の夕方である。禪師はすでに根も力も尽きてしまつて、フラフラと雪の中に倒れようとした時である。電光か、雷鳴、はつと我にかえれば大師の一喝、

「貴様は何用あつてここに来たか。」

「疑惑があつて参りました。」

「うたがいはどこにある。」

「心の中に御座います。」

「然れば心を持つて来い！」

彼は懐剣をぬきはなち、サツと左手を斬り落した。

しばらく手の斬口を凝視していたが、

「私は体の中に心があるかと思いましたが、こころは御座いません。」

「こころがなければ疑いもない！」

一喝食わされたが、大師ははじめて彼をいたわつて上げられた。

「よく来た。よく来た。我は汝の如き真剣なる求道者の来るのを待つこと、ここに九年、ここにはすでに三人の弟子がいるが、まだ我のすべてを継ぐべき器ではなかつた。三晩も雪の中に立たせ、手まで斬らせてかわいそうであつたが、汝の菩提を求めるとたえるかたい心を知ることが出来た。」

実に彼こそ、禪門二十九世、達磨の衣鉢を継いだ普覚大師その人であつた。

重ねて言う、

生命を継ぐ者は生命を捧げてゆく。

『無量清浄平等覚経』に曰く、

「人の命、希に得べし。」

仏、世におわせども甚だ値い難し

智慧あつて致るべからず

もし聞見せば精進して求めよ。

設令世界に満てらん火をも

この中を過ぎて法を聞くことを得ば

かならずまさに世尊となりて

一切の生老死を度せんとすべし。」と。

屑の時間でしたことは屑である。

何かの序にしたことに力はこもらない。

いい加減な心持ちでしたことはいいい加減である。

生命すら投げ出す思いで求めたものが、生命以上の価をもつ。

年々歳々、京都をさして上つてゆく同行たち、堂々たる本願寺の大伽藍を見てあきれ、清水寺、三十三間堂と、見物がてらの遊山気分でなかつたら結構である。

「各々十余ヶ国のさかひをこへて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御ころぎし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。」

『歎異抄』第二章は、この生命すらかえりみず、道を求めずにはいられない求道者たちの前に開放せられた、聖人の大信の赤裸々な告白であります。

往生極樂の道

関東の同行たちは、何を求めて「身命をかえりみず」に歩んだのでありましょう。それは「たづねきたらしめたまふ御ころぎし、ひとへに往生極樂の道を問いきかんがためなり。」でありました。

往生極樂の道……………

現代の若人たちは「往生極樂」という言葉を、老人のたわごととして、一笑のもとに葬つてしまいます。極樂などがあつてたまるか。それは無智な老人たちの気安めだ。科学が進んで、人間も一個の動物であることがわかり、肉体が滅すれば燈火の滅したが如く、一切の肉体細胞は元素に分解されて、酸素、水素、窒素……………等々となり、土となるのだ。往生極樂なんて思想は、感情的な、幻影的幸福にすぎないのだ、と言いきります。人間は物質である。その肉体は元素に分解される。これは決して間違いではありません。科学的な存在である以上、物質的な法則で説明されたつて当然であります。

だが、それだからとて、往生極樂という問題が、それきり現代人には価値のない、過去の無智な人たちの夢として葬り去られてしまうでしょうか。私たちはもつと深い他の立場から、この問題の解決を求めずにはいられませぬ。人間は知的解決を求めると共に、感情や意志を持ち、価値的に、人格的に、道義的に生きようとする存在でもあります。そこに単なる冷たい知よりも別の世界が開いて来ます。

往生

往生極樂の道……………。私どもはこのお言葉の中から三つのものを見出します。

(1)往生。(2)極樂。(3)道。この三つの言葉が表わす世界であります。

まず「往生」とは読んで字の如く「生きて往く」又は「生れて往く」ことであります。しかるに、この言葉ほどまちがつて使われている言葉はありません。「往生した」という言葉は「死ぬる」とか「困った」とかいう時に使われています。けれども往生という言葉の本来の意味は、決して「死ぬる」とか「困る」とかいうことではありません。単なる無自覚な存在より、自覚的な生活へと転廻して、一切の苦惱生死をふみ超えて、真実なる生活者となることを意味するのであります。絶対価値に目覚め、深い道義の上に明るく生きぬくことを意味するのであります。

極樂の道

次に「極楽」であります。往生と極楽とは離して考えることの出来ない言葉であります。ただぼんやりとした生存から真実の生活に覚めた者には、そこに、生活の本質、一貫した方向、あるいは高い理想がなくてはなりません。極楽とは実にかくの如き我らの真実生活の根底となるべき「彼岸」であります。

極楽、浄土、寂靜無為楽、無量光明土……いずれも唯一絶対の彼岸をさすのであります。それは、善悪を超え、美醜、迷悟、生死等一切の相對の世界を超脱した絶対的価値の円満成就されたる最高の理念であります。我らの生活を生かし、批判する無限の光の国であります。我らの帰りゆくべき故郷であり、真実活動の根源であります。往生とはかかる彼岸へと生きることであります。

往生と言えば極楽があり、極楽があれば往生があります。しかして現実と浄土とを一つにするものは「道」であります。道をおいてどこに生活の意義がありません。永遠に「往生極楽の道」とは、現在にも未来にも、本当に生きる道のことです。永遠に真実に生かされてゆく大道が往生極楽の道であります。私は更に項を改めて詳しく並べてゆきます。